

各農業改良普及センター所長 様
各農業協同組合長（営農担当者） 様
各病害虫調査協力員 様
各農業関係機関長・団体長 様

京都府病害虫防除所長
（公印省略）

病害虫発生予察情報について
下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第5号（7月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 < 平年比（前年比） >
イネ	葉いもち	並（多）
	紋枯病	やや少（やや多）
	セシロウカ	並（並）
	ツマク・ロヨコハ・イ 斑点米カメムシ類	やや少（やや少） 並（並）
ダイズ、 アズキ	アブラムシ類とウ ルス病	やや多（多）
ナシ	黒斑病	やや多（多）
	黒星病	やや多（やや少）
ブドウ	べと病	並（多）
カキ	うどんこ病	やや少（やや少）
果樹全般	ハダニ類	やや少（並）
	カメムシ類	並（並）
チャ	炭そ病	山城 並（やや多） 丹波 やや少（やや少）
	チャノコカクモンハマキ	山城 多（多） 丹波 並（やや少）
	チャノホソカ	山城 やや多（多） 丹波 やや少（やや少）
	カンザワハタニ	やや少（やや少）
	チャノキイロアザミウマ	山城 やや少（少） 丹波 やや多（並）
	チャノミトリ	並（山城：多）
	ヒメヨコハ・イ	（丹波：やや多）

作物名	病害虫名	予想発生量 < 平年比（前年比） >
チャ	クワシロカイガラムシ	山城 やや多（並） 丹波 並（やや少）
果菜類	疫病・褐色腐 敗病	並
	うどんこ病	やや多（並）
	アブラムシ類と モザイク病	並（並）
	アザミウマ類 ハエトリハエ類	やや少（やや少） やや多（やや多）
ウリ類	べと病	やや多（やや多）
	炭そ病	並（少）
キュウリ、トウ ガラシなど	斑点細菌病	並（並）
ネギ	ネギアザミウマ	やや多（やや多）
	ネギハエトリハエ	やや多（やや多）
野菜全般	ハダニ類	やや少（やや少）

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

予報本文の見方

(例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「I 用語の定義」の「5 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は前年の実際の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく(-)、丹波でやや多い(+).
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の(-)、(+)は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、(-)の場合は発生量が少なくなる要因、(+)は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

近畿地方 1 か月予報 (6 月 2 1 日から 7 月 2 0 日までの天候見通し)

平成 2 0 年 6 月 2 0 日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1 週目は平年並の確率 5 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	3 0	3 0	4 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日 照 時 間	3 0	3 0	4 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病害虫発生予察の一つの根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病害虫防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 29 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を 1 週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は、山城、南丹、丹後で平年並、中丹で平年比やや多い（＋）。
- （２）補植用苗での発生を認めていない。
- （３）BLASTAM（いもち病発生予察システム）によると、好適感染条件が６月下旬に出現しているが、頻度は低い。
- （４）長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（－）。
- （５）向こう１か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。
- （２）いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。
- （３）ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。
- （４）平成１６、１７年度の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。
MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２）前年の発生量は平年比少なかった（－）。
- （３）向こう１か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- （２）早植栽培で発生が多く、気温３０前後で多湿条件が続くと多発する。
- （３）出穂２０日前の発病株率が２０％以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- （４）昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- （５）窒素の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6 月第 3 半旬現在、予察灯での誘殺を認めていない。
- (2) 6 月中旬現在、本田での発生を認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨期に海外から飛来し、吸汁加害する。
- (2) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので、今後の予察情報に十分注意する。
- (3) 7 月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり 10 頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 トビイロウンカ、コブノメイガ

6 月第 3 半旬現在、トビイロウンカの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

5 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6 月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（ - ）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

6 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6 月中旬現在、本田での発生量は平年並～やや多い（ + ）。
- (2) 6 月中旬現在、畦畔での発生量は平年比やや少ない（ - ）～平年並。
- (3) 向こう 1 か月の気温は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田付近の雑草等で増殖し、本田へ侵入する。
- (3) 水田周辺雑草の刈取りを出穂 10 日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除（共同、一斉）が有効である。

7 その他の病害虫

白葉枯病

- (1) 祭り晴は罹病しやすく、暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、茎立後、葉が濡れているときにほ場に入らないなど注意する。

イネツトムシ

晩植田や肥効田で発生が多くなる。防除時期は7月第6半旬～8月第1半旬の幼虫ふ化期である。

フタオビコヤガ(イネアオムシ)

- (1) 近年、発生が増加傾向にある。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

イネクロカメムシ

- (1) 近年、増加しているので発生地、特に常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭(幼虫を含む)以上の発生を認めたら防除を実施する。

ダイズ、アズキ

1 アブラムシ類とウイルス病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 6月第4半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は例年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 作付け時からシルバーテープ等を用い、アブラムシ類の飛来を防止する。また、ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。
- (2) ウイルス病はアブラムシ類が伝搬するので、発生初期の防除に留意する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。

(2) 向こう 1 か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 6 月から 7 月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。

(2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 6 月中旬現在の発生量は平年比やや多い（+）。

(2) 向こう 1 か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 雨が続き、涼しい年に発生が多くなる。

(2) 夏から秋に、徒長枝に発病しやすい。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

(1) 6 月中旬現在の発生量は平年並。

(2) 向こう 1 か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。

(2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 6 月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（-）。

(2) 向こう 1 か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 6 月から 7 月に雨が多いと、葉に被害が現れやすい。

(2) 冷夏では、夏場も発病が続く。

5 ハダニ類（カンキツ、ナシ、ブドウ）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

(1) 6 月中旬現在の発生量は、ナシ、ブドウで平年並、カンキツで少ない（-）。

(2) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 梅雨明け以降、急激に増加するので注意する。

(2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

6 カメムシ類(チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、アオクサカメムシなど)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 予察灯での誘殺数は平年並。
- (2) チャバネアオカメムシのフェロモントラップでの誘殺数は例年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から侵入し、局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) カキ、ナシ、ミカン、モモなどの無袋栽培では、被害が多くなる。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年並(前年比やや多い)
丹波 平年比やや少ない(前年比やや少ない)
防除適期：三番茶芽の第1～2葉開葉期

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや少ない(-)。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比多い)
丹波 平年並(前年比やや少ない)
第2世代幼虫ふ化期：7月第3半旬～7月第4半旬(平年比やや遅い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年比多く(+)、丹波で平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺盛期は平年比やや遅い。
- (3) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代成虫が6月下旬～7月上旬に発生し産卵する。4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
第3世代幼虫ふ化期：
山城 7月第4半旬～7月第5半旬（平年比やや早い）
丹波 7月第5半旬～7月第6半旬（平年並）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波でやや少ない（-）。
- （2）フェロモントラップへの誘殺盛期は、宇治で平年比やや早く、綾部で平年並。
- （3）向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）通常、5回世代を繰り返し、7月上中旬に第2世代成虫が発生し産卵する。
- （2）卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- （3）鉢摘み園の防除適期は、三番茶芽の第2葉開葉期である。

4 カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（-）。
- （2）向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）繁殖力は10～30の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。
- （2）通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- （3）園をよく見回り、発生が多い園では二番茶摘採後の防除に留意する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年並）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- （1）6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年比やや多い（+）。
- （2）向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）主に二番茶期以降に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- （2）多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- （3）発生が多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期の2回散布の効果が高い。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（山城：多い）
（丹波：やや多い）

防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は平年並。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）二番茶期以降、発生が多くなる。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年並）
丹波 平年並（前年比やや少ない）
第２世代幼虫ふ化期：７月第６半旬～８月第２半旬（平年並）

予報の根拠

- （１）第１世代幼虫の発生量は、山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間３回（一部山間部では２回）発生する。
- （２）多発している園も認められるので、園を見回り発生の多い園では注意する。
- （３）第１世代の発生が多かった園では特に注意し、幼虫ふ化期の防除に留意する。
世代が進むほど幼虫ふ化時期がばらつき、ふ化期間が長くなるため、第２世代の防除は２回散布の効果が高い。
- （４）薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

8 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成１６年８月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。６月中旬の巡回調査では、山城地域の多くの園で発生を確認し多発園も認めた。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）成虫の発生
年に４回発生する。
- （２）対策
農薬による防除適期は若齢幼虫期であり、成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分である。
- （３）登録のある薬剤
 - ・ハチハチ乳剤（１,０００倍、摘採１４日前まで／１回）
 - ・アプロード水和剤（１,０００倍、摘採１４日前まで／２回以内）
 - ・アプロードエースフロアブル（１,０００倍、摘採１４日前まで／１回）
 - ・ダニゲッターフロアブル（２,０００倍、摘採７日前まで／１回）

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病 (キュウリ、トウガラシ、トマト、ナス、スイカ、カボチャなど)

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水によりまん延することが多いので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 果菜類 うどんこ病 (キュウリ、トウガラシ、トマト、ナス、スイカ、カボチャなど)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 6月中旬の巡回調査の結果、発生量はトマトで平年比多く(+)、他の果菜類で発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) トウガラシ類では、ハダニの被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。
- (3) トウガラシでは菌糸が組織内で増殖するため薬液が十分付着するようていねいに散布する。

3 ウリ類 べと病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は多湿条件を好み、侵入やまん延には水分が必要である。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

4 ウリ類 炭そ病

予報内容 発生量：平年並(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 種子伝染する他、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (2) 夏秋作に発生しやすいので注意する。

5 斑点細菌病（キュウリ、トウガラシなど）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入し発病する場
合が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 アブラムシ類とモザイク病（果菜類）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、アブラムシ類の発生量は平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 6月第4半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は例年比やや多い
（ + ）。
- (3) 6月中旬現在、トマトのモザイク病の発生を認めている（ + ）。
- (4) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するもの
もいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害する。
- (3) 密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (4) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (5) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に
注意する。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（－）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。
- （２）雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

9 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は平年比やや多い（＋）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- （２）葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- （３）作物残さは発生源となるので処分する。

10 ハモグリバエ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は平年比やや多い（＋）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- （２）黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- （３）発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- （４）施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

11 ネギハモグリバエ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は平年比やや多い（＋）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- （２）作物残さは発生源となるので処分する。

1.2 褐斑病（キュウリ）

発生すると被害が大きいので、夏秋キュウリでは注意し予防に努める。

1.3 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV：Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気である。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認された。

最近では、平成20年1月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。
発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

栽培が終了または終了が近いハウス

- （1）栽培が終了したら、**蒸し込みを行い、コナジラミの死滅**を図る。
- （2）発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
- （3）野良生えトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。

農薬の使用について

- （1）登録農薬に対する薬剤感受性の低下を回避するため、**同じ農薬及び同一系統に属する農薬の連用は避ける**。
- （2）下葉の裏側まで薬剤が十分にかかるように散布する。

1.3 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJpL）、バイオタイプB（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプQが確認されている。バイオタイプQは平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになり、平成20年2月には37都府県に分布を拡大している。

農業総合研究所と病虫害防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城で確認され、平成19年には福知山市まで発生地域が拡大した（平成19年11月6日付け防除所ニュース第14号参照）。また、平成20年6月の調査では、京都市以南で発生を確認している。

タバココナジラミ類は薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、総合的な防除対策（トマト黄化葉巻病参照のこと）が必要である。

花き（キク）

1 白さび病、黒斑病、褐斑病

ほ場をよく見回り、発生を認めたら、被害葉を摘み取るとともに、薬剤を散布する。

病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病害虫情報サービス	
・テレホンサービス	0771 - 23 - 6442
・ホームページアドレス	http://www.pref.kyoto.jp/byogai/

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-9513